



令和8年4月7日（火）川崎市立西丸子小学校

## 桜と共にスタート

川崎市立西丸子小学校 校長 吉村 あかね

児童のみなさん、保護者の皆様、ご入学、進級おめでとうございます。令和8年度の西丸子小学校がスタートしました。

教員になってから毎年春になると、今年は卒業式に桜が咲くかな、入学式までもつかな、と気を揉むようになりました。今年の桜の花は、恒例の春の嵐に何度も見舞われながら、ずいぶん長く咲いてくれました。その逞しさと美しさに改めて見とれてしまいました。国内で主流の染井吉野は、最近寿命となる木が多く、私の家の近所でも、緑地や公園の染井吉野が次々に切り倒されていきました。蕾をたくさんつけている木が切り倒されるのを見て、さぞかし無念だっただろうと思ったりしました。

桜の蕾が今にも開きそうになると必ず思い出すことがあります。それは中学生の時、国語の教科書の教材として出会った随筆についてです。大岡信さんの『言葉の力』を初めて読んだ私は、深い感銘を受けました。人間と桜は通じるところがあり、「言葉の一語一語は、桜の花びら一枚一枚」であるとし、「言葉というものの本質が・・・それを発している人間全体の世界をいやおうなしに背負ってしまう・・・人間全体がささやかな言葉の一つ一つに反映されてしまう」の例として、桜を挙げているのです。その例えのうまさにも、中学生ながら圧倒されましたが、とにかく私が深く感銘をうけたのは、桜の生き様です。大岡さんもある染色家からこの話を聞いた時は、一瞬体がゆらぐような不思議な感じにおそわれたそうです。春先、間もなく花となって咲き出でようとしている桜の木は、花びらだけでなく、木全体で懸命になって最上のピンク色になろうとしているというのです。あの、桜の花びらの何とも言えないほんのりとしたピンク色は、幹の、樹皮の、樹液のピンクで、桜は全身で春のピンクに色づいているのです。普通は花びらでしか見るできない、この桜の一刻も休むことのない活動の精髓を、染色家が染物を通して教えてくれます。

これはまさに、言葉の使い手として毎日を懸命に生きている子ども達のことではないかと思いました。自分の内面から紡ぎだされる言葉を使って周りや繋がったり、失敗したりする。そして、その内面の成長が、また言葉によって表出される。それを毎日全身全霊で繰り返しているのです。子ども達には、自分色を表出できるよう、毎日を懸命に生きてほしいと思います。また、我々大人は、そんな子ども達の心の声に耳を傾け、自分色が出せるように常にアンテナをはり、一人一人の個性を引き出す役割が担えるようにしていく所存です。

新しい門出を迎えた子ども達とともに歩いていく西丸子小学校に、今年度も、ご支援、ご協力よろしくをお願いいたします。